

チベット文献による『大日経』の研究

—プトンの著作を通して—

高松 宏 寶

(クンチヨック・シタル)

はじめに

プトン (Buston Rin chen Grub 一二九〇—一三六四) は、チベット大藏経を本格的に整理した大学者であり、大乘仏教と密教に関する研究の貢献は大きい。その中でも、八世紀から十二世紀頃までにサンスクリット語からチベット語への仏典の翻訳がほぼ完成されたのちに、すべての密教経典を四種タントラ (所作・行・瑜伽・無上瑜伽タントラ) に分類し整理したことは、今日のチベット密教に大きな影響を残している。それまでのチベットでは、学僧達によってインドから伝えられたさまざまな分類方法が存在していたが、プトンはそれらを整理し、悟りの速さや根本的な内容に基づいて、実践面での位置づけを整合させたのである。これについては、三冊の解説を書き残している。また、プトンは、インド仏教史を著した人物としても知られている。

さて、このようにチベット仏教において大学者と知られるプトンであるが、真言密教における重要な経典である『大毘盧遮那成仏神変加持経』(『大日経』) に関しても解説を残しており、その解釈に触れることは意義深い

と考える。『大日経』は漢訳とチベット訳各々の注釈の間に、諸品の配列や品数の相違があることはご承知のとおりである。チベット文献を読み解くことは、これら異同への解釈をはじめとした『大日経』研究の一助となるものと思う。

『大日経』について、チベットではプトン以外にも何人かの学僧が研究を残しており、それらは主に実践(事相)をテーマとするもので教理的な内容ではなかった。真言密教においては典拠と位置づけられているが、チベットでは後期密教が主流となったこともあり、そこまでは関心が持たれていなかったという背景がある。

プトン自身は、ブツダゲヒヤの『略釈』に基づく『曼荼羅儀軌の十四門分別』を頼りに、『大悲胎藏曼荼羅儀軌』(rNam snang mngon byang gi dkyl chog)⁽²⁾を著しつゝ、やうに実践的な説明を加えた解説を行っている。著作の多さで知られるポドン・チョクレー・ナムギェル(Bödong Phyogs las rnam rgyal 一三七五〜一四五一)は、大悲胎藏曼荼羅、灌頂、護摩の儀軌について、二十一の著作を残している。その他、パンチェン・ラマ一世ロサン・チューキ・ギェルツェン(Blo bzang Chos kyi rgyal mtshan 一五六九〜一六六二)、ダライ・ラマ七世ケルサン・ギヤムツォ(bskal bzang rgya mtsho 一七〇八〜一七五七)なども解説しており、いくつかの著作は今日でも手に入る。また、パンチェン・ラマ三世ロサン・ペンデン・イエシエー(Blo bzang dPal Idan ye shes 一七三八〜一七八〇)は、曼荼羅や灌頂の儀軌とともに、印相と真言について三つの著作を記しており、今後機会が得られれば、紹介したいと思うところである。

プトン同様にチベットの大学者の一人であるツォンカパ(Tsong Kha pa 一三五七〜一四一九)も、『真言道次第広論』(sNgags rim chen mo)⁽⁴⁾の中で『大日経』に基づいた解説を行っている。具体的には、三下タントラ(所作・行・瑜伽タントラ)の本尊瑜伽について、曼荼羅の建立の仕方、灌頂と阿闍梨の資格、有相・無相瑜伽の

実践に関してなどである。⁽⁵⁾

このようにチベットにおいても『大日経』が数多く取り上げられているが、特に、前述の『曼荼羅儀軌の十四門分別』と、チベット密教の実践における灌頂と曼荼羅の儀式の中では、必ず唱える偈頌の大部分を『大日経』から引用している。この点に注目すると、『大日経』は、密教の根本的な構成がよく出来上がっている經典であると理解できる。

今回は『大日経』に関するプトンの意見に焦点を当てて検証していきたい。論題としては、1、信解行地と十地の関係、2、即身成仏觀、3、品数の相違、4、まとめとして、の四点である。

1、信解行地と十地の関係について

『大日経』第一章のテーマの一つとして、信解行地と十地と三劫段との関係が説かれている。これに関しては、漢訳とチベット訳の解釈に相違が見られる。すなわち、漢訳の善無畏・一行の注釈である『大疏』においては、信解行地の範囲は十地の範囲そのものであるとされている。⁽⁶⁾

しかし、ブツダグヒヤの注釈では、「信解行地の実践によって十地が生じる⁽⁷⁾」と解釈している。これに基づいて、プトンは四種タントラの解説の中で、更に詳しくこの問題を取り上げているので検討してみたい。ここでは、(1) 信解行地の範囲、(2) 三心とは何か、(3) 十心とは何か、という順にプトンの説を考察する。

(1) 信解行地の範囲

ブツダグヒヤの注釈などでは、人無我と法無我を説いて、さらに心無自性を解説し、それらは三劫によって乗

り超えていくことのプロセスを説いている。その中で、信解行地と十地と三劫の関係を論じている。これについて、プトンは以下のように解釈している。すなわち「大乘仏教や密教修行者は、利根と鈍根の二つに分けられる。その双方とも、無我を理解した上で、入 (juga)・住 (gnas)・起 (ldangs) の心を現観して修習していく。さらに、四摂事と六波羅蜜の修行を先に行ってから、諸の衆生を十地に導くことと、そのために相応しい因である悟りの三門 (身口意) の諸の功徳を実際には取得していないけれども、聞思の智慧によって、言説として説かれた内容をその通りであると受け入れることは、信解である。その信解する心を持って、究極的な目的 (悟り) を成就するための行は信解行であり、これこそは基体たる境地なので信解行地であると理解している。」とプトンは述べている。

菩薩の十地の諸の功徳を實際に得ていないけれども、衆生を悟りへと導くために、それらの功徳を聞思の力で理解して信じる心は、ここで信解と言われている。そのために四摂事、十波羅蜜の修行に励んでいる段階を、信解行地と言う。

またブツダグヒヤも「三門の諸の功徳を理解して、これこそであり、それ以外はない。」と信解を解説し、さらに「その功徳をただ信解するだけでなく、それらの功徳を得るために精進努力していくことは行である」としている。

これらの引用から検証すると、信解行地は十地そのものではなく、十地に入る準備段階と解釈できる。

(2) 三心とは何か

プトンは『大日経』の「心は不生不滅であると認識する心は第一の理解である。二は、すべての分別の網から

正しく超越した無分別の心であり、「(三は) 障碍なく理解して諸の衆生を正しい道に導こうとする心は大悲を生じることであり、これは三心である。」⁽¹¹⁾ という偈文を引用して、三心とは、1. 究極的なあり方を理解する心(入)、2. 無分別の心(住)、3. 大悲(起)⁽¹²⁾、と定義づけている。

さらに『大日経』の「信解行地は、三心を普く修習することであり、諸の波羅蜜の行と、四摂事の行などによって信解の地を取得し、それは比較できないものであり、無量であり不可思議である。無量なる智が生じること十心によって得られることである。私が少し説いたものは、すべてこれによって得られる。それゆえに一切智者が信解ということを解説し、智慧を持つ者は一劫によってこの地を正しく超えられる。」⁽¹³⁾ という部分を引用し、「この三心の実践は、智慧の十地を完成させる手段であり、それは信解行地であり、それらは一劫によって乗り超える。」⁽¹⁴⁾ と説明している。

(3) 十心とは何か

『大日経』の中には、信解行地においての十心について明確には記されていないので、十心とは何かという具体的な解釈にはいくつかの説がある。プトンは、十心は十波羅蜜の行の実践そのものではなく、その十波羅蜜の修行に向かおうとする加行であると述べている。別の言葉では「十波羅蜜の支分の加行」、または「十波羅蜜の成就の加行」⁽¹⁵⁾ であると表現されている。

プトンはブツダグヒヤの解釈に基づいて、信解行地とは、一般大乘仏教に説かれる四種加行道(煖・頂・忍・世第一法)の位置づけとほぼ同じとし、これは歓喜地(智慧の地)に入るための行であり、十地はその結果であ

るとしている。またブツダグヒヤは、十地を完成するための手段は信解行地であるとし、「また一劫によってこの地を正しく超えられる」という『大日経』の偈文などから考察すると、信解行地と十地は因果関係にあると解釈することができるのである。そして『大日経』では、信解行地は大事な修行の段階であることと、同時に真言密教に入るための重要な課程であると説かれている。

2、即身成仏観

密教の教えやタントラ仏教において、即身成仏や一生で成仏できるかできないかという課題は、過去の学者達の間でも見解が分かれているところもある。特に、今回の『大日経』における一生成仏で、成仏の可能性、すなわちその手段を説いているかいないかということは、極めて重要な課題であり難しいところである。

過去のチベットの学僧の中にも、肯定、否定双方の見方がある。例えばツォンカバは、密教による即身成仏を強く主張している。しかし『真言道次第広論』における三下タントラの解説においては、即身成仏に関して、三下タントラに説かれている手段だけではできずかどうかが疑問として⁽¹⁶⁾いる。

次にプトンによる解釈を見ることにする。

プトンは、自身の四種タントラ解釈論である「総タントラの解説」の中で、『大日経』における即身成仏について、肯定的な可能性があると論理的に解説している。しかしながら、このプトンの見解は、以前発表されている論文には見当たらない。

プトンは、『大日経』をはじめとして、いくつもの行タントラ、瑜伽タントラに属する経典を根拠に述べながら、それらの経典に、この一生で成仏できる手段が十分に説かれていると述べている。しかし、ここで言われている

「この一生」という概念と、真言密教や弘法大師が説かれている即身成仏との意味合いに関しては、十分検討する必要があると思う。紙幅の都合上それは後の課題とし、ここではプトンの三下タントラに基づく解釈を検証していきたい。

プトンは『大日経』といくつかのタントラを引用しながら、それらの内容に基づいて即身成仏の可能性と手段を指摘して解説している。プトン自身の言葉に基づくと、

「ここ（密教の教え）には、一生によって成仏を成就できるなどの、正当な根拠がある。また、もし無上瑜伽タントラにおいてはそのようにできても、三下タントラにおいてはできないというなら、そうではない。⁽¹⁷⁾」
「Manjusi-mūla-tantra (Tbh.543)」においては⁽¹⁸⁾

この生でよく苦行して縁がある者は、この生においても無理なく真言を成就し、その業縁がここにあらわれることになれば、この生においても成仏（成就）できるであろう。

『大日経』付属品には

菩薩たちは真言門において菩薩行を行ずることによって、この生のみにおいて、無上なる現等覚の悟りを得るだろう。

とあり、それはなぜかというならば、この経に

秘密主よ、ここでの生 (tshé) ということは、如来によって生まれる (skye ba) ことの想い (‘dus shes) に過ぎない。諸の菩薩たちが、その想いも、法の本性を到達する三昧を得る前に（すでに）滅亡しているから。⁽¹⁹⁾

と、難しいテーマの内容を引用している。さらに、「Virasekhara (Tbh.480)」においては「無数の劫で生じてくる優れた地波羅蜜の行によって、もし高い秘密の境地を得て歓喜（地）を成就して、その瑜伽行者が努

力するならば、この生に涅槃を得るだろう。」と説かれており、⁽²⁰⁾それらの意味合いをプトンが解釈している。所作・行タントラの教えによって、材料 (rdzas) と真言 (sngags) によって明知の悉地を成就してから、天の五欲の功德を受用しながら実践したことによって、悟りを得ると主張している。そのことについては、全く同じ内容が「Manjusri-mūla-tantra (Tsh.343)」にも説かれておりとプトンが指摘している。また『不動明王行タントラ (Tsh.495)』においても、同じ長い引用をしている。

さらに『大日経』より「密教行者はそれを自分で受けて、空などに行くだろう。何劫に住して輝いていくだろう。その菩薩は希望するときに死ぬだろう。他の宇宙世界にも行くことができるだろう。主な〔本尊は〕さまざまな姿をとって、材料によって真言を成就して吉祥なる供養の行をあまねくして、それは墮落せずに材料の悉地であると説く。⁽²¹⁾」さらに、「これはこういうことにより、菩薩は歓喜になり、長く生きることができて、五欲の功德を体験して諸の世尊たちに供養して、俗世間を超越したこの道を成就することになる。諸の如来と菩薩たちはこの意味合いをお考えになって、密教の行の法 (手段) によって、この密教の実践儀礼を喜んでお説きになった。⁽²²⁾」と説かれている。

プトンは、このような引用に基づいて、さらに所作・行タントラにおいて一生成仏を説くのは矛盾があるのではないかという疑問に答えながら、すなわち所作・行タントラは、瑜伽タントラなどに比べると少し遅いが、般若経 (顕教) には本尊 (瑜伽) の力によって成就することがないけれども、密教においては材料の真言など (共通の悉地) を得た上で、本尊の力 (三密加持) によってすぐれた悉地を完成することができるからであると解説している。

プトンやツォンカパは、顕密の大きな違いは本尊瑜伽の実践の有無で区別しており、『大日経』では本尊瑜伽

の実践方法が説かれる理由で、一生で悟る可能性があると解釈したい。ここで問題として残るのは、一生という概念の長さが違ってくるという問題である。チベット密教では、「一生一身」(tshé gcig lus gcig) という概念のもとで、即身成仏の可能性が論じられることがある。この場合、「一生」は必ずしも今生の体のみであるとは限らないという考え方があられる。タントラ仏教においては、我々の身体概念は、今日の一般的な科学概念とは一致しないこともありうると言えよう。

3、品数の相違

またプトンは、「総タントラ部の解説」の中で、『大日経』の構成と諸品の関係について、注意して触れている。基本的に漢訳、チベット訳の構成について、相違が見られることは事実であり、さらに、チベット訳の中にも意見の相違が見られることもあるので、まずはプトンの主張を述べたい。

プトンは、『大日経』は三部族の經典の中の如来部に当たると指摘しており、説く場所と説き方について少し述べている。場所については「大日如来が、花の基体の心髓の莊嚴の界という所で説いたとし、その世界の特徴は『金剛手灌頂経』⁽²⁴⁾に説かれている」と論じており、「大日如来が菩薩の行を完全に修行し終えた世界」⁽²⁵⁾であると指摘している。「そういう世界の、八つの円満を持つ素晴らしい宮殿の中で、菩薩の姿で獅子の座の上で大日如来と円満な眷属たちによって、身口意の平等性の本質という名(内容)で説法がなされた。その説法の円満なる加持の力で眷属たちも三昧に入って、釈尊が無尽なる身口意の法で説法を説いたことをご覧になって、そのように十一の円満なる要素によってその世界観を示して、金剛手が秘密主に尋ねる形でこの経の内容を説いた。」とプトンが記している。その内容としては、菩提心とそれを生起する方法を示すために「住心品」を説き、その手

段として「具縁品」が説かれたとしている。

プトンが論題にしているのはまず、ブツダグヒヤの注釈の中の「この経には「如是我聞一時」という表現があるはずがない⁽²⁷⁾」ということである。なぜなら大日如来は菩提心髓に常に住していらつしやるからである。時期と場所は決定的なので、いつ、どこでということはあるにない。さらに「経の編者が聞いたことではなく、理解したことなので、ありえない⁽²⁸⁾」とプトンは述べ、「しかしながら今のタントラ經典では、「如是我聞一時」ばかり見られる」と述べており、複数の原文が存在した可能性と、それらの内容に相違があったのではないかと述べている。

またプトンは、『大日経』の諸品をすべて自身の著作にまとめているとしながらも、そこには二十六品しか存在していないという問題もある。現在、我々が触れている経は、すべて二十九品と七の付属品から成り立っている。それは、小野塚幾澄の「大日経解題」⁽²⁹⁾や、松長有慶の『密教經典成立史論』、さらに田島隆純、Alex Wayman の『Study of The Mahāvairocanaśūtra (Dainichikyō)』⁽³⁰⁾における解釈も同様であり、いずれにしても漢訳とチベット訳が異なるという点で意見が一致している。同時にプトンも「今の原文にはこれしか見られないけれども、これではまだ付属品なども完成したとは思えない」とし、それはなぜかと言えば「ブツダグヒヤの注釈の中の付属品からの引用分も、現在の諸品の中には見つからない⁽³¹⁾」と述べているのである。

またツォンカパも「本尊の真実」という品は、ブツダグヒヤの広釈には見られるが、原文には見つからない」と記している。ツォンカパは、他のタントラの注釈など様々な内容に関して、『大日経』の引用であるとされている部分が『チベット大蔵経』と数多く不一致であると述べている。この件に関しては、筆者はツォンカパの『大日経』に関する研究を、別の論にまとめている⁽³²⁾。

プトンはインドのタントラ文献に関して一番詳しい方であるとチベットでは知られているが、十四世紀にはさまざまな原文が存在していたために、このような相違が起こったのではないかと考えられる。すなわち、ナルタン版、デルゲ版といった出版の違いという意味ではなく、サンスクリット語の原文が複数あったのでないかと考える。ちなみに、ツォンカパはこの経を大変に充実した内容と捉えていた。しかし、『大日経』をはじめタントラ仏教の文献に関して多くの実績を残している J.W. de Jong や Alex Wayman は、『大日経』は不完全ではないか、「時代によって変化してきた」、「時代を経るうちに、様々な伝統が設定を加えた」などと指摘しているように、構成の面では完全ではなく問題があったのではないかと推察される。これらの問題は、サンスクリット原典が見つからない限り解決は困難であろうと考える。

4、まとめとして

これまで、プトンによる『大日経』の著作について検討してきた。以上の内容以外にも、まだ多くの研究課題を見出すことができる。例えば『大日経』におけるプトンの「二つの瑜伽（三昧）の実践」、「十四の三昧耶戒について」、「曼荼羅の建立」、「三句」の見解などについて、言及する必要があると思う。また、『大日経』における思想の展開という観点もある。

プトンの信解行地の解釈は、根本的にはブツダグヒヤを含め瑜伽行派の解釈と変わらない。しかし漢訳の注釈とは異なり、この境地は完全に十地に入るための準備段階の修行であると理解できる。つまりこの境地こそ、本格的に真言密教の行に入るための教理的な準備段階と言うことができる。このプトンの解釈は、のちのチベット仏教の学問の世界に大きな影響を及ぼした。

また、即身成仏についての解説は、様々な典拠に基づいた正統的な解釈であると思うが、今回のこれだけの研究では本件の課題を解決するには十分ではない。

諸品の構成や品数について今回提起した課題は、我々タントラ仏教や密教の研究者にとっては、相応しいテーマであると考ええる。なぜなら、文献について大きな問題に直面する典型的な事例だからである。本件に関してもさらに、今後の論文によって研究する必要があるだろう。

『大日経』の教理と実践的側面について研究していくことは、真言密教をよりよく理解するための大きな手がかりとなる。今回その中でもブトンの見解を取り上げたのは、彼こそチベット仏教の学問界において、文献に関する唯一の人物であるからである。

略語・参考文献

『総タントラの解説』

: *rGyud sde spyi'i man par bzhag rgyud sde thams cad kyi*

tu rgyas pa mdo sdei dhang pai rgyal po shes bya bai
chos kyi man grangs // D.No.494キベッター記
『大日経略釈』

: *gsang ba gsal bar byed pa/ zhes bya ba (rGyas pa/ 'bring/*

: *Rnam par snang mdzad chen po mngon par rdzogs par*

bsdus pa) Part 15 (pha & ba), The Collected works of Bu

byang chub pai rgyud kyi bsdus pa 'i don // D.No.2662
『大日経広釈』

ston (New Delhi, International Academy of Indian Culture,

1969) : Tsh.No.5167-69

『大日経』

: *Rnam par snang mdzad chen po mngon par rdzogs par*

: *Rnam par snang mdzad chen po mngon par rdzogs par*
byang chub pai rgyud kyi grel ba // D.No.2663
『真言道次第論』

byang chub pa nman par sprul pa bying gyis rtab pa shin

: *rGyal ba khyab bdag rdo rje 'chang chen poi lam gyi rim*

- pa gsang ba kun gyi gnad nam par phyed ba zhes bya ba* // (Ga) : Toh.No.5281
 A.Wayman & R.Tajima
 : *The Enlightenment of Vairocana*, "Study of the Vairocanābhisambodhitantra and Study of the Mahāvairocanaśūtra". Motilabharstass, Delhi, 1992.
 R. Tajima 1936
 : *Étude sur Le MAHĀVĀIROCCANA-ŚŪTRĀ Dainichikyō* : Librairie Damerique Et Dorient, Paris, 1936
 松長有慶
 : 『密教経典成立史論』、法蔵館、昭和五十五年
 酒井真典
 : 『酒井真典著作集』、第二、大日経広釈全訳、法蔵館、昭和六十二年
 Sihar K. 1992
 : "Mahāvairocanaśūtra in the Studies of Tsong Khapas sNgegs rim chen mo", Tibetan Studies, Narita, 1992
 Sihar K. 1992
 : "A Study in the Mahāvairocanaśūtra Appearing in Tibetan Non-canonical Works": 大学院研究論文集、大正大学出版部、Vol.16
 Sihar K. 1992
 : 「ブタンによる四種タントラの解釈について」大正大学総合
- 仏教研究所年報、第二十二巻
 吉田宏誓 1993
 : 『空海思想の形成』春秋社、1993
 Hopkins J 1979
 : J. Hopkins, *Tantra in Tibet*, New York, 1987
 Hopkins J 1981
 : *The Yoga of Tibet, The Great Exposition of Secret Mantra* -2 & 3, By Tsong Kha pa, George Allen & Unwin, London, 1981.
 de Jong 1984
 : J.W. de Jong, "A New History of Tantric Literature in India", *Acta Indologica*, Vol. 6, Narita, 1984.
- 註
 (一) 1) 論書⑤首書『総タントラの解説』: ① *rGyud sde spyi'i nam par gzhag pa-rgyud sde rin po che'i gter sgo byed pai lde mig ces bya ba* // (略本) : Toh.No.5167. ② *rGyud sde spyi'i nam par gzhag pa-rgyud sde thams cad kyi gsang ba gsal bar byed pa zhes bya ba* // (中本) : Toh. 5168 ③ *rGyud sde spyi'i nam par gzhag pa-rgyud sde rin po che'i mdzes rgyan zhes bya ba* // (広本) : Toh.No.5169 (2) The Collected works of Bōdong Phyogs las nram rgyal.

Vol.40, Reproduced by Tibet House, New Delhi, 1971.

照

- (3) *Rnam par srang mdzad mngon par dzogs par byang chub pa nam par sprul pa byin gyis hob pai rgyud las byung bai snying rje chen poi snying po can gyi dkyil khor gyi cho ga sku i bkod pa mi zad pai mdzod kyi sgo rnam par byed pa zhes bya ba//*: Toh.No.5149
- (4) このテキストはツォンカパの重要な著作であり、タントラ仏教全体を四種タントラに分類して論理的に解説したものである。近代の研究は数少ないが、一部の和訳および英訳を紹介する。
- 第四章までの和訳・
 第四卷までの和訳・
 (1) 高田仁覺：『インド・チベット真言密教の研究』密教学術振興会発行・部分的な英訳・
- (2) J.Hopkins : 『Tantra in Tibet』(New York 1979) & 『Yoga of Tibet』(London, Wisdom of Tibet 1981)
- (3) R.W.Giebel : 『A Synopsis of Tsong kha pa's views on Esoteric Buddhism, based on the sNgags rim Chen po』 J.O.S.S. 21, No.2, p.112-126
- (4) T.Tada : 『sNgags rim chen po's sa bcad』 Nagoya, 1978
- (5) Sihar K. "Mahāvairocanaśūtra in the Studies of Tsong Khipa's sNgags rim chen mo" : Tibetan studies, Narita, 1989 を参照す
- (6) 吉田宏哲 : 『空海思想の形成』春秋社 : p.95-97, p.120P を参照す
- (7) D. No. 2663, Cu 42b1-2
- (8) Toh. No. 5168, Ba112b1-3
- (9) Sangs rgyas kyi yon tan rnam shes na/ de nyid yin gyi/ gzhan ni ma yin no/ snyam du de shin tu mos pa skye ba'o // (Cu.41a6) . D.No. 2663.
- (10) mos pa spyod pa zhes pa ni/ chos de la mos pa tsam ma yin gyi/ de rnam gyi kyi yon tan goms par bya ba nan tan byed pa ste// Cu41a7.
- (11) Toh. No.5169, Ba112b7-113a2
- (12) gnas lugs rtogs pai sems / nam par mi rtog pai sems/ rnying rje chen poi sems ste/ sems gsum sgom pai sgo nas // Ba112b3
- (13) Tha.158b3-5, 大正18b3
- (14) Ba1114, 7.6
- (15) yang lag gi sbyor ba (Ba113a4) & sgrub pai sbyor ba (113a2), Toh.No. 5169
- (16) Toh.No.5281, Ga.29a4-b1
- (17) 'dir tshe gcig gis 'grub pa la sogs pai lung rnam dag yod pai phyir ro/ gal te rnal byor bla med la de ltar yin yang/ rgyud sde 'og ma rnam la de mi rung ngo zhes na/ ma yin te//. Toh.No.5169, Ba109a5
- (18) ibid. Ba109a6-b1

- (19) Byang chub sems dpai' gsang sngags kyi sgo nas byang
 chub sems dpai' spyad pa spyod pa nmams kyiis tshé 'di
 nyid la bla na med pa yang dag par rdzogs pai' byang
 chub mngon par rdzogs par 'tshang rgya bar 'gyur ro/
 yang de cii' phyir zhes na/ gsang ba pai' bdag po/ tshé
 zhe bya ba de ni de 'dzin gshegs pas skye ba la 'du shes
 su bya ba zad de/ byang chub sems dpai' de nmams kyiis
 'du shes yang chos kyi ngo bo nyid du chud pai' ting nge
 'dzin thob pai' i sngon rol tu 'gag pai' phyir ro// ibid.,
 Ba9a7-b1, D.No. 494, Tha257a4-5
- (20) ibid., Ba109b2
- (21) sNgags pa rang gis de blangs nas/ nann mkha' la ni 'gro
 bar 'gyur / bskal par gnas shing gzi brjid che/ rgyal sras
 de ni 'dod na 'chi/ 'jig rten khams ni gzhan du'ang 'gro/
 grtso bo sna tshogs gzugs 'chang ba/ rdzas las byung bai
 sngags bsgrubbs pas/ dpal ldan mchod pa rab tu byed/ 'di
 ni nyams pa mi pai' / rdzas kyi' dnos grub yin par bshad
 // D.No.494, tha184a3-4; Toh.No.5169, Ba110a1-3.
- (22) Toh. No. 5169, Ba110a3-6
- (23) ibid., Ba10b2-4
- (24) rGyud 'di nram snang sangs rgyas pai' zhing me tog gi
 gzhi snying poi' rgyan bkod pai' zhing du gsungs pa yin
 la// ibid., Ba116b3
- (25) ibid., Bab3-6
- (26) 'di skad bdag gis thos pa dus gcig na/ ibid., 116a2
- (27) phyag rdor la sogs pa yang thos pa mi grtso'i/ don rtogs
 pa grtso bas//
- (28) Ba116a3.
- (29) 『兩部大經』(大日経解題)真言宗豊山派宗務所(昭和
 五十八年) P522-3
- (30) A.Wayman & R.Tajima (1992) : p.241-242
- (31) Toh.No.5169, Ba117b6-
- (32) Sihar K. 1992 : p.245-256参考せ. Hopkin J (1981),
 p.191
- (33) JW de Jong 1984: p.100 (the text of the Dainichikyō has
 been much changed in the course of time, and that
 different traditions a have been established).

〈キーワード〉大日経、信解行地、一生成仏